
赤い目

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い目

【Nコード】

N3207F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

街に新しくできた人気のラーメン屋。美味しいという評判だがその店ができてから街がおかしい。果たして何が。怪奇ものです。

第一章

赤い目

「ねえ、あの店もう行った？」

その時この街では新しくできたラーメン屋が評判になっていた。とにかく美味いということも多くの人々の話題になっていたのである。

「まだ行ってないけれど」

「じゃあ行きなさいよ。すごく美味しいんだから」

そんな話が街中至るところで話されていた。会社でも商店街でも公園でも。これは高志のいる学校でも同じであった。

大門高志。街の中学校に通うごく普通の少年である。髪は今時の学生にしてはださいと言うべきか真面目と言うべきか染めてもおらず整髪料も着けてはいない。ごく普通の七三分けであった。

顔もごく普通である。とりたてて不細工でも美男子でもない。細面で特徴のない顔であった。目はやや切れ長で奥二重であった。特徴と言えばその目であろうか。それ以外はこれといって特徴のない顔であった。

流行とかそういったものに疎い彼はまだそのラーメン屋には行っていなかった。食べることは好きだし興味もあるのだが何となく行っていないのである。気分が乗らないのだ。

「あんたまだ行ってないのね」

隣の席にいる久保葉子が話を振ってきた。小学校、いや幼稚園の頃から同じで一緒のクラスになったことも何度もある。幼馴染みと言えば聞こえはいいが地味な高志はいつもこの葉子に押されている。背は小さいが元気のよい娘でソフトボール部に所属しており肌はよく焼けている少したれ目なのが特徴であった。

「ああ、あのラーメン屋ね」

話を振られた高志はそれに合わせてきた。

「美味しいって話だよね」

「そうよ、すっごく美味しいんだから」

葉子にはっこりと笑ってこう言った。

「麵のこしもしっかりしてるし味もいいのよ」

「ふん」

「それ以上にスープとチャーシューがね。最高なのよ」

「そんなにいいんだ」

「あれはね、きっと特別のダシと肉を使ってるのよ」

葉子は上機嫌で話している。どうやら気分が乗ってきたらしい。

「コクもあるし喉ごしもいいし。一度飲むともう止められないんだから」

「そしてチャーシューは？」

「これがね、脂身も赤身もよくって。口の中でとろけて。とにかく

一度食べるともう止められないのよ」

「それで毎日食べてるの？」

「ええ」

彼女は頷いて答えた。

「部活の帰りにね。あんたもどうよ」

「どつって言われてもねえ」

そう言われた彼は困った顔を作った。

「その店すっごい人が多いんだろ？」

「勿論」

葉子は胸を張って頷いた。

「いつも行列になってるのよ。すっごいんだから」

「並んでまで食べるのはなあ」

別に流行とかそういったものに敏感でもない彼はそこまでして食べる気にはなれなかったのである。困った顔をしたまま言った。

「そこまですなくても美味しいラーメン屋なら一杯あるじゃないか」

「ところがそのラーメンは特別なのよ」

「そんなにいいの」

「そうよ。だから来なさいって、一度でいいから」

「来なさいって君と？」

「そうよ、他に誰がいるのよ」
半ば強制になってきた。

「折角女の子が連れて行ってあげるって言ってるのよ。断るなんて許さないから」

「そうは言われてもね」

だが気分が乗らないものは乗らない。やはり困った顔をしたままであった。

「何時か行くから」

「約束よ」

逃げることはできなかった。葉子は隙を作ることなく高志に対してこう言った。

「いいわね、逃げたら承知しないから」

「わかったよ。ところで」

「何？」

彼はずつと葉子の顔を見て話をしていった。そしてあることに気付いたのである。

「君最近勉強かゲームばかりしてない？」

「!?!? どういうこと!?!?」

葉子はそう言われてキョトンとした顔になった。

「いや、目がさ」

「目!?!?」

「うん、赤いんだ。どうしたのかなって思ってたね」

見れば少し赤くなっていた。だが今はそれ程赤くはない。少し充血したという程度のものであった。軽い結膜炎に見えるようなものであった。

「別に何ともないけれど」

葉子は答えた。

「そうなの」

「けど。そんなに赤い？」

「それ程じゃないけれどね」

彼はそう言って宥めた。

「けど。あまり酷いなら病院に入った方がいいよ。確か部活じゃシ
ョートだったよね」

「うん」

「あのポジションボールが飛んで来ること多いから。用心に越した
ことはないよ」

「わかったわ、そうする」

「何か最近目が赤い人多い様な気がするけれどね」

「そうかしら」

「これは僕の気のせいだと思うけれど。何か病気で流行ってるの
かな」

「怖いこと言わないでよ」

「御免御免」

そんな話をしながら学校での時間を終えた。葉子はソフトボール
部に向かい高志は卓球部に向かった。彼等はそれぞれ全く違う部活
に所属していたのである。

部活を終えて家に帰る。その途中擦れ違う人の目が赤いことが多
いの気付いた。

「あれ、まただ」

高志はそれに気付いて呟いた。

「また目の赤い人がいるな。何でだろ」

それを不思議に思う。思いながらやはり病気で流行っているの
かと思っただ。

「目の病気かな」

咄嗟に失明やそういった不吉なことが思い浮かぶ。それで気持ち
が暗くなるのを感じた。

慌ててその考えを消す。気持ちが暗くなっただけならどうにもならない
からだ。

そして忘れて家に帰る。だが家でも同じことが起こっていた。

「お帰りなさい」

母が出迎えてくれた。だがその目はやはり同じ色であった。微妙にはあるが。

「どうしたの、その目」

高志は驚いて母の目を見ながら言った。

「目？目がどうしたの？」

母はその言葉に驚いて高志に言葉を返した。どうやら気付いてはいないようである。

「いや、何でもないよ」

「変な子ね。帰ってくるなりそんなこと言って」

母はどうやら自分では気付いていないようである。そしてまた高志に声をかけてきた。

「今日ね、お昼ラーメン食べたのよ」

「ラーメン!？」

「ええ。ほら、今街で評判のあのお店よ」

「ああ、あそこね」

学校で葉子が話していた店と同じである。もうラーメンと言われただけでわかった。

「お母さんはじめて食べたけどもうすっかり美味しくって」

「学校でも評判になってるよ」

「そうでしょ。それがね、評判以上で」

母はさらに機嫌がよくなってきた。

「一度食べたら病みつきになるのよ。お母さん三杯も食べたのよ」

「そんなに?」

「おかわりしちゃって。もう満腹」

「太るよ、そんなに食べたら」

「いいのよ、もうあのラーメンが食べられるのなら」

「どうやらそのラーメンにかなり参っているようであった。」

「これからも毎日食べたい位だわ」

「そうなんだ」

「あんたも一回行って来たらしいわ」

彼女は息子にもそう勧めてきた。葉子と同じ様に。

「とにかく一回食べてみたらいいから。今度行って来たらしいわ」

「気が向いたらね」

「もう、いつもそんなんだから」

母は高志のそうした素っ気無い言葉を聞いて眉を顰めさせた。

「お父さんと同じなんだから。流行に鈍感ね」

「自分を持って行って言ってみて欲しいな」

そして高志はそうした言葉にいつもこう返すのが決まりであった。

「お父さんのそういうところが好きになっただっていつも言ってるじ

ゃないか」

「それはそうだけれど」

そう言われるともう何も言えなかった。母は黙ってしまった。

第二章

「何時か行くから。それでいいね」

「ええ」

母からは何とか逃げられた。だが何時かは行かなくてはならないと思う様になってきていたのは事実であった。

「おかしいな」

高志はそれを不思議に感じていた。

「何でラーメン屋にどうしても行かなくちゃいけないんだろう」

そう思うと根拠は不明だった。葉子は母親に言われたからだがそれだけでこうも義務的に考えるのはやはり不自然であった。

だがすぐにそれは頭の中から消えた。ゲームをはじめたからである。高志はラーメンのことはすっかり忘れてゲームに熱中しはじめたのであった。

それから数日後高志は学校の帰り道を歩いていた。やはり目の赤い者が目立っていた。

「まただ」

すぐにそれに気付いた。今度は皆前に見たよりも目が赤かった。そして赤い目を持つ者自体が増えていたのであった。

「何なんだ、これは」

学校でもそれは同じであった。葉子も他のクラスメイトもその目がさらに赤くなっていく。またそうした者も増えていった。何時の間にか先生達もそうであった。もう目が黒い者はクラスに数人しかいないといった有様であった。

だがそれに誰も気付かない。誰もおかしいとは思わない。高志はそれが不自然でならなかった。そんな時であった。

「もし」

ふと左手から声がかかった。年老いた男の声であった。

「そこの坊や」

「僕ですか？」

高志は坊やと言われ声がした方に顔を向けた。もういい加減子供扱いされたくもないがそれでも応えた。

「そう、あんたじゃ」

見れば年老いた易者であった。易者のあの独特の着物を着て白い髪と顎鬚を持つている。見るからに温和そうな顔を

しており易を手に椅子に座っていた。

「気付いてくれたようじゃな」

「僕に何の御用でしょうか」

高志はこの老易者に声をかけられ戸惑いながらも声を返した。

「あんたは大丈夫なようじゃな」

「!?!」

そう言われて今度は訳がわからなくなってきた。

「どういうことですか」

「ここでは何じゃ」

易者はまた言った。

「場所を変えようか。こつちへ来なさい」

「はあ」

易者は店仕舞いをした。そして彼を案内して裏道に入った。そしてアパートに入って行ったのである。

「ここが今のわしの家じゃ」

「ここがですか」

「どうじゃ。中々立派な家じゃろう」

「はあ」

どうということはないごくありふれたアパートである。中もテレビに布団、本棚の他にはこれといってなく一人身の老人らしい質素な部屋であった。だが本棚を見て少し不思議に思った。

そこにあるのは古い関係の本だけではなかったのである。やけに古い、まるで百年も二百年も経ったかの様な古い本まであった。古風な字で書かれており中々読めるものではない。そうした本も何冊

もあつた。それを見るとこの老人はとても只の易者ではないようであつた。

(名のある人なのかな)

高志はそれを見て思った。だが確証はない。そんなことを思っている間に老人は茶を彼に差し出してきた。

「まあ飲みなされ」

「はい」

二人は向かい合つてちゃぶ台に座つた。見れば茶も結構高そうなものであつた。増々只の易者ではないように思えてきたのであつた。茶を飲む。実際に飲んでみるとやはり美味かつた。いつも家で飲んでゐるものとは明らかに違つていた。

「美味いじゃろう」

「ええ、まあ」

高志は老人に言われるままそれに頷いた。

「この茶は普通の茶ではないからのう」

「違つんですか」

「そうじゃ。この茶は力を高める茶じゃ」

「力を」

「靈力をな。高める効果を持つておる」

「靈力!？」

高志はそれを聞いて顔を顰めさせた。

「まさか。そんな御冗談を」

「いやいや、本当のことじゃ」

老人は笑いながら応えた。

「これからのことを考えるとな。飲んでおかねばならんのじゃ」

「これからですか」

「左様。近頃おかしなことに気付かぬか」

老人は高志に尋ねてきた。

「おかしなことですか」

「もう気付いていると思うがの」

「目のことでしょうか」

彼はとりあえず思いついたことを尋ねてきた。

「最近どういうわけか赤い目をした人が多いんですけれど」

「あなたは学生さんじゃな」

「はい」

高志は答えた。

「中学生です」

「学校でもそうかな」

「そうです。クラスメイトや先生も。皆目が赤くなってきています。それも段々増えていってます」

「そうか。それは思ったより深刻じゃな」

老人はそれを聞くと目を閉じた。そして着物の中で腕を組んで大きく嘆息した。

「何かあるんですか？」

「中国では何故目が赤くなると言われているか知っているかの」

老人はこう尋ねてきた。

「目が、ですか」

「中国ではな、人を食うとその罪により目が赤くなると言われているのじゃ」

「人を食べる！？まさか」

流石にそんなことは信じられなかった。

「街中の人がですか。まさか」

「じゃが確かに目が赤くなっている者は増えていよう」

老人はそれを必死に否定しようとする高志に対して言った。

「それはそうですが」

「それが何よりの証拠じゃ。わしはそれを聞いてこの街に来たのじやからな」

「引越されてきたのですか」

「うむ。どうやらこの街には魔物がある」

彼は言った。

「魔物が」

「そやつが人の肉を街の者に食わせておるのじゃ。赤い目の者がいるのはそのせいじゃ」

「けれどどうやって」

高志はそれでもわからなかった。

「あれだけ多くの人に。どうやって食べさせるんですか」

「方法は幾らでもある」

彼はまた言った。

「店に出すとかのう」

「店」

それを聞いてハツとした。

「心当たりはあるか」

「あるどころか」

彼は言った。

「最近話題のラーメン屋でしょうか。最近皆あそこで食べていますから」

「ラーメンか」

老人はそれを聞いて厳しい顔になった。

「成程な。それなら人の肉を入れるのも容易じゃ」

彼は言葉を続けた。

「ラーメンはどうやって作るか知っておるな」

「はい」

「骨でダシを採るな。そこじゃ」

「そしてチャーシューも使いますね」

「本来は豚や鳥から採ったりするが他のものも使えないわけではないのじゃ」

「嘘だ……」

「じゃがその線が一番高いのではないか」

老人は高志を見据えてこう述べた。

第三章

「そのラーメン屋ができてからなのじゃろう？目の赤い者が出て来たのは」

「はい」

「おそらく間違いない。おそらくその店主は人ではない」
老人の声までが険しいものとなってきた。

「異形の者じゃ。この街を乗っ取りに来たのじゃろう」

「この街をですか」

「目が赤くなるのは何故じゃと思う？」

老人はまた問うてきた。

「わかりません」

そんなことまで一介の中学生がわかる筈もなかった。今聞いている話だけでとても信じられないというのに。

「赤い目はな、魔物の目なのじゃ」

老人はこう説明した。

「つまり人を食らうということとはそれだけで魔道に堕ちているということになるのじゃ」

「そうだったんですか」

「人ではなく魔物になっていく」

老人は言葉を続けた。

「その結果どうなるか。わかるであろう」

「はい」

頷くしかなかった。あの目を見ていれば頷くしかなかった。
「それを防ぐ方法は一つしかない。元を断つ」

老人は言い切った。

「その為にあんたにも何かとやってもらいたい。よいかの」

「僕がですか」

「そうじゃ。あんたはまだあのラーメンを食ってはおらぬな」

「はい、まあ」

何時か食べようと思っていたなどとは言えなかった。ただ頷くだけであった。

「では決まりじゃ。協力を頼むぞ」

「はい」

話しているうちにこの老人はやはり只の易者ではないと確信するの至った。漫画や映画で見る陰陽師か何かではないだろうかと思うようになった。

「さて、まずは偵察じゃ」

老人はそう言うと言ち上がった。老人とは思えない動きであった。

「お若いのが、案内して下さい」

「わかりました。それじゃ」

高志はそれに従った。こうして二人はその渦中のラーメン屋へと向かうのであった。

そこは一見何の変哲もない只のラーメン屋であった。ありきたり過ぎて高志としてはかえって拍子抜けした程であった。

「あそこですよ」

「ふむ」

二人は向かいにある店の物陰から覗き込んでいた。行列ができている以外は確かにこれといっておかしいところのない店であった。

「ううむ」

「何かあるのですか」

高志は呻きはじめた老人を見上げて問うた。

「これはまずい」

「何かあるのですか？」

「感じぬか、あの妖気を」

老人は高志に問うてきた。

「妖気」

「そうじゃ。これ程まで強烈な妖気は感じたことはそうそうない」
彼はそこまで言った。

「あの店にいる者。どうやら只の魔物ではないようじゃな」

「というところな魔物なんでしょうか」

「それはまだわからん」

老人はこれに対しては素っ気無く返した。

「わからないって」

「だが一つ言えるのはわし等も相当な覚悟をせねばならんという」とじゃ。これはわかるな」

「はあ」

何時の間にか完全に話に巻き込まれていた。迷惑と言えば迷惑だがこうなってしまうたからには仕方のないことだとも思った。

「一旦戻るぞ」

老人は踵を返してこう言った。

「戻るんですか」

「そうじゃ。三日後にまたわしの家に来るがいい」

「はあ」

「その間に身を清め用意をしておく。全てはそれからじゃ」

「わかりました。それじゃあ三日後。学校から帰ったらすぐ来ます

ね

「いや、そんなに早くなくともよい」

「いいんですか」

「うむ。あの店が閉まってからでよい。わかったな」

「はい。それじゃあその時に来ます」

「頼むぞ」

こうして高志と老人はとりあえず別れた。その間に高志は新聞等で奇妙なことに目がいくようになっていた。やはりそうしたことを聞いているのは当然のことであった。

「関係があるのかな、やつぱり」

新聞の社会欄を見てこう呟いた。見れば高志の住んでいる辺りでホームレスや不良の失踪が相次いでいるのである。

それも急にだ。それまでそこにいた者が忽然と姿を消すのである。

何処に行ったのか誰も知らないしわからない。だが今の高志にはその消えたホームレスや不良達の行方が何処にあるのかわかる気になつていた。

「あの店なんだろうな、やっぱり」

そう考えるのが当たり前の様に思えてきたのだ。老人に会ってからそうであつた。それを考えるとやはりあのラーメンはとても食べる気にはなれなかつた。

「どうしたの、新聞なんか読んで」

そんな彼に母親が声をかけてきた。

「それも社会欄なんか。いつもはスポーツかテレビ欄しか見ないのに」

「あ、勉強にいいかなって思つてね」

高志はこう言つてその場を取り繕つた、見れば母の目はさらに赤みを増してきていた。

「勉強に」

「うん、先生に言われたんだ。新聞を読むのも勉強にいいって。それで読んでるんだよ」

「よく言われることよね」

母はそれを聞いてこう言つて頷いた。

「私もあなたの歳にはよく言われたわ」

「やっぱり」

「どちらにする新聞を読むのはいいことよ。巨人が負けてたら特にね」

「巨人が」

母は野球が好きなのである。だが巨人は大嫌いであつた。高志もそうであるし父もそうであつた。一家全員がアンチ巨人なのであつた。

「読むのが楽しいし。やっぱり巨人は負けないと駄目なのよ」

「そうだね」

これは全くもって同意であつた。高志も両親の影響か巨人は大嫌

いであつた。特にあの会長だか何だかが出るたびにテレビのチャンネルを変える程である。見たくもない顔であつた。

第四章

「今はオフだからつまらないけれどね」

「全く」

「来年も負けてくれればいいのよ。何が史上最強打線なんだか」

母の悪口は続いていた。彼女の癖として巨人のことを言い出すと止まらないというものがあつた。とにかく巨人が嫌いなのであつた。母が去ってからでも社会欄を見続けていた。その後で古新聞を漁つてみたがやはり同じであつた。失踪事件がやけに多い。それもあのラーメン屋ができてからであつた。

「疑いようがないかな」

しかもこの街を中心として。何かあるとしか思えなかつた。それを考えるとあのラーメン屋は増々怪しいものであつた。

そして三日が経つた。高志は塾の帰りに老人の家に立ち寄つた。来てみるともう老人は用意を全て済ませていた。

「早かつたのう」

彼は高志が部屋に入って来たのを確認して微笑んだ。

「もうこつちは支度は出来ているぞ」

「そうなんですか」

だが見たところ三日前と何ら変わるところがない。服もあの時と同じ易者の服である。

「その服でいいんですか？」

「化け物退治は格好ではないのじゃ」

老人はからからと笑いながら言った。

「要は心じゃ。よいかな」

「はあ」

「今からそれを見せよう。では行くぞ」

こつ言つて席を立つた。そして高志を連れてあのラーメン屋に向かうのであつた。行く途中に老人は一度高志に対して何かを手渡し

た。

「これは」

「後で役に立つ。持っていないなされ」

「はい」

見れば小刀であつた。白い木の柄の中に入っている。一見只の小刀だがその白い柄には何か書いてあつた。だがあまりにも達筆すぎて高志には何と書いてあるかわからなかつた。それを見ながら歩いているうちに店に辿り着いた。

見ればもう店は閉まつていた。入口ののれんはしまわれシャッターがかけてられていた。しんとして昼の行列も何処にも見えはしなかつた。まるで全く別の場所であつた。

老人はその店の前へすすす、と進んだ。そして裏手に回りその壁に手をやった。

「ここじゃな」

険しい顔でこう呟く。

「お若いの」

そして高志に顔を向けてきた。

「わしの手を取りなされ。そしてこれから何があつても騒いではならんぞ」

「わかりました。それじゃあ」

「うむ」

老人に言われるままその手を取つた。すると老人はもう一方の手で壁を押した。するとその手は壁の中に入り込んでしまつたのだ。まるで溶け込む様に。

「あつ」

「じーーーーーっ」

声を立てそうになる高志に対して口だけでこう言う。手は両方共空いてはしないからであつた。

「はい」

高志はそれに従い頷いた。やがて手だけでなく身体全体が壁の中

に入り込んでいった。

そして高志自身も入った。中に入ってみるとそこは厨房であった。暗く何も見えない。

老人は目を凝らして灯りを見つけた。そして灯りを点けると冷凍庫に向かった。こうした店でよく使われる非常に大きな冷凍庫であった。

そこを開ける。そして中から何かを取り出した。それを高志の前に出した。

「これじゃ。やはり思った通りじゃった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

高志はそれを見て絶句した。それは人の頭であったのだ。若い、茶色の髪をした女の頭であった。氷漬けになりながらも虚ろな目で高志を見上げていた。

「頭」

ようやく声を出せた、まだ信じられないといった顔で呟いた。その声も震えていた。

「これでわかったじゃろう」

「はい」

老人の言葉に誘われる様に頷いた。

「本当に人の肉を使ってたんですね」

「そこにあるスープの中を見ているがいい」

老人は側にあるスープの鍋を指差した。するとそこにも人の頭があった。髪の毛と溶けた目玉と脂、そして剥がれた肉が浮かんでいる。その奥に中年の男の首があったのだ。

「この店では頭からダシを取っている様じゃな」

「頭から」

「うむ。ここでは違うようじゃがこうしてダシを取ることは多い」

老人は言った。

「長浜のラーメンとかな。あれは豚の頭でダシを取る」

「そうだったんですか」

「うむ」

九州のラーメンは豚骨が主流である。コクの強い白いスープのラーメンが多い。その中でも長浜のラーメンは強いコクで知られている。豚の脳味噌がよいダシを出すとされているのだ。

「それと同じじゃ。ここでは人の頭を使っていたのじゃ」
「うえ」

高志はそれを聞いて気分が悪くなった。今覗いた鍋の光景が目から、脳裏から離れなかった。

「吐きそうか？」

「いえ、大丈夫です」

何とかそれは抑えた。だが気分が悪くなったのは事実であった。

「そうか。これだけではないからな。まだ吐いてはならんぞ」

「まだあるんですか」

「見てみるがいい」

そう言いながら今度は冷凍庫の中を指差した。その中にあるものは大体予想がつく。見たくないというのが本音だった。だがここは見た。何とか勇気を振り絞った。

覗いてみた。するとそこには頭よりもっとおぞましいものがあった。高志はそれを見てまた絶句してしまった。

「う．．．．．」

「驚いたか」

老人はそんな彼に声をかけてきた。

「はい．．．．．」

高志は頷いた。そこには切断された手や足、骨、そして内臓があった。耳や鼻、そして何かよくわからないものもあった。いや、それはよく見れば胎児であった。

「内臓まで．．．．．」

「おそらくレバナニラや及第粥に使っていたんじゃろっ」

「及第粥」

「中国にあるお粥の一つじゃ」

老人はこう説明した。

第五章

「昔科挙という試験があつての」

「はあ」

「役人を選ぶ試験じゃ。難しい試験でな、豚の内臓を入れた粥等を食べて栄養をつけながら勉強したと言われている。テストに合格、つまり及第する為にな」

「そうだったんですか」

「それが及第粥じゃ。中国ではよくある料理じゃ。どうやら料理自体は本格的な店のようじゃな」

「そうなんですか」

「心臓もある」

見ればその通りであつた。凍つてはいるが確かにあつた。

「耳や鼻まであるんですね、あと骨とか」

「中国ではな、動物は何処までも食べるんじゃない」

老人はこう語つた。

「豚がそうじゃろう。足も耳も食べる。当然内臓もな」

「沖縄料理と一緒にすね」

一度家族と旅行で沖縄まで行ったことがある。その時に食べたことがあるのだ。

「まあ何処までも食べるのは同じじゃな」

老人はその言葉に頷いた。

「手や足はチャーシューにしていたのじゃろうな。指もスープか何かに使っていたのじゃろう」

「何でも使つんですね」

「左様。そこにある赤子もな」

「赤ちゃんもですか」

最初何かわからなかつたものだ。丸ごと入っているので何が何か把握出来なかつた。理解してあらためておぞましさを感じられてき

たのである。

「胎児のスープはな、栄養があるとされている」

「そうなんですか」

「精がつく、とな。裏の社会では食べられているらしいのじゃ」

「嫌な話ですね」

「わしも細かいことは知らぬがな。じゃがこうして食べるといふ話があるのも本当のことじゃ」

「嘘じゃないですよ」

「その証拠がこの中じゃな」

「はあ」

「中国でもヨーロッパでもこうした話はあるんじゃ」

老人は忌々しげにこう述べた。

「人を食う話はな。日本にもないわけではない」

「飢饉の時とかでしょうか」

「知つとるのか」

「学校の授業で聞いたことがあります。本当のことかどうかちょっと信じられませんでしたけど」

「左様。生きる為にな、屍を喰らうたりしておったのじゃ。時には互いに殺し合い、喰らい合う」

「まるで地獄ですね」

「少なくとも人の為すことではない。じゃから眼が人のものではない。赤くなるのじゃ」

「赤くなるんですね」

「そういうことじゃ。元々は魔物の所業だったのじゃ。それが止むに止まれず。時には好んで喰う輩もおったが」

「それがここの店なんでしょうか」

「いや、少し違う」

ここで老人の声が陰しくなった。

「この店の者はもっと禍々しい者じゃ。少なくとも人ではない」

「人間ではない」

「そう、それは」

「わしに何か用か、人間よ」

ここで向こう側、店の出口の方から声がした。

「!？」

高志と老人はその声に気付き声がした方を振り向いた。するとそこに異形の者が立っていた。

服はごく普通の中華料理店の料理人のそれであった。白いものでありそれ自体には何の変哲もない。そこだけ見れば只の人間であった。

だが顔が違っていた。口は耳まで裂け、そこからシューシューと白い蒸気を出す涎を垂らしていた。舌は赤黒く、そして蛇のそれに似ていた。目は真つ赤で異様に釣り上がっている。そして肌はまるで絵の具を塗ったかの様に青いものであった。

「フン、貴様か」

老人はその異形の者を見据えて言った。

「この店で人の肉を出しておったのは」

「そうだ」

怪物はそれを認めた。

「辺りのホームレスや不良共を攫ってな。この街の者に食わせておつたのだ」

「やはりな」

「中には子を孕んでいる女もおつたな。不良の中にな」

「じゃああれは」

高志はその言葉にハツとした。

「女の人のお腹から」

「それ以外に何かあるのじゃ？」

その奇怪な涎を垂らしながら答える。

「子は女の腹から出て来るもの。それを使って何が悪い」

「化け物」

「よせ、もうわかりきったことじゃ」

老人はそう言つて高志を制した。

「そうやって人の肉を調達したのは何の為じゃ？」

「知りたいか」

「無論、その為に来た」

老人は答えた。

「この街を我が物にする為か？」

「その通りだ」

まるで獣が無理に人の言葉を話しているかのような声であった。それを聞いただけで高志は心臓を握り締められているかのような恐怖感を覚えた。

「この街をわしの街にするつもりなのじゃ」

「人の肉を喰わせその心を魔物にしてか」

「その通り」

怪物は答えた。

「上手くいっておると思つておつたが。まさか気付かれるとはな」

「気付かれぬ筈がなかるう」

老人は落ち着いた声で言葉を返した。

「赤い目の者があれだけいれば。嫌でもわかるわ」

「そう言う貴様は只の人間ではないな」

「只の？ 買い被つてもらつては困るのう」

老人はそれを聞いて飄々と笑つた。

「わしは只の爺じゃよ」

「嘘をつけ」

「嘘ではない。少なくとも御前さんの様に魔界から出て来てはおらぬさ」

どうやらこの怪物は元々人界にいた者ではないらしい。老人の見立てによると魔界の住人であるらしいのだ。

「只普通の人より御前さん達のことは知っているだけじゃ」

「わしを知つておるといふのか」

「左様。何に弱いのかもな」

「ではここから逃げてみるがいい。逃げられなかったならば」
そう言いながら右手をゆらりと動かした。すると冷凍庫から氷漬
けになった胎児が浮かんで来た。そしてそれをその右手で受け取っ
た。

それを口に運ぶ。氷のまま喰らう。バリバリと氷の碎ける音が聞
こえてきた。

「この赤子の様になる。覚悟せよ」

「逃げるつもりはないさ」

だが老人はそれを否定した。

「何!？」

「わし等がここに来たのはな、ただ見物に来たわけではないのじゃ」
「どういうことだ」

「知れたこと。人間が化け物の前に姿を現わす時は一つしかないじ
やろっ」

「喰われる為か」

「面白いことを言う」

だが老人はその脅しを一笑に伏した。

「そんなことの為に来る馬鹿がおるか」

「ではわからんな」

怪物は笑いながら応えた。

「では何の為なのか」

「主を倒す為じゃ」

老人は言った。言いながら懐から何かを取り出す。

「覚悟せよ。地獄で今までの罪を償わせてやる」

「やってみせるがいい」

そう言いながら怪物はその手に巨大な刃を出してきた。

料理に使うものではなかった。まるで鉈の様に巨大な刃であった。

高志はそれを見て怪物を童話等に出て来る山姥の様に思った。

(そつえば近いかも)

ふとここでこう思った。そんな彼に老人が声をかけてきた。

「あれを出しなされ」

「あれって？」

「さつき渡したじゃろう。小刀じゃ」

「あれですか」

「そうじゃ。わしはこの怪物を倒す。それで身を守りなされ」

「わかりました。それじゃあ」

「うむ」

自分の身は自分で守れということらしい。だがどうもそれだけではないような気もした。しかしそれは黙っていた。それよりも速く老人と怪物の戦いがじまったからである。

老人は懐から札を出していた。そしてそれを怪物に投げつける。

「まずはこれを受けよ！」

「又ツ！」

札は一直線に怪物に襲い掛かる。その動きは只の札のそれとは思えなかった。まるで流星の様であった。

それが怪物に張り付く。するとそこから白い蒸気が沸き起こった。塗炭に怪物が苦しみはじめた。

「グオオオオオオオ・・・」

「どうじゃ、この札の威力は」

老人は呻き声を挙げる怪物を見据えながら言った。

「効くじゃろう。何せ主の最も忌み嫌うものが書かれているからな」

「わしの忌み嫌うもの」

「麒麟じゃ」

老人は言った。

「麒麟・・・」

それを聞くと怪物の顔がさらに見抜く歪んだ。恐怖の色が浮かび上がったのだ。

第六章

「左様、主は土の属性を持つな」

「何故それを」

「人を喰らう魔物は往々にして死人かそれに類するものであることが多い」

「そうなんですか」

「吸血鬼を知っておるな」

「はい」

高志は老人の言葉に頷いた。

「あれは人の血を吸うとされているが中には人を喰らうものもおるのじゃ」

「そうだったんですか」

これは意外なことであった。

「映画のドラキュラとかとは全然違うぞ」

老人はここで言った。

「あれはかなり格好よく書いておるからな。実際はもっと残忍で血生臭い連中なのじゃ」

「そうだったんですか」

正直高志も吸血鬼といえばあのドラキュラをイメージしていた。だがそれは違うというのである。

「墓から甦った死人でな。凶暴で時には生きている者まで貪り喰らう」

「とんでもない奴ですね」

「中国の吸血鬼もそうなんじゃ。ほれ、キョンシーがおるな」

「はい」

これも映画からであるが知っていた。飛び跳ねながら人に襲い掛かる凶暴な魔物である。生きた屍であるのはもう知っていることではあった。

「あれじゃ。あれが中国の吸血鬼なんじゃ」

「それは映画で見ましたけど」

「今日の前におけるあれもな。同じ様なものじゃ」

「そうなんですか」

「うむ。元々は人間だったのじゃろう。じゃが何かしらの事情で甦り」

「魔界の住人になったんですね」

「おそろくな。そして人を喰らう魔物となった」

老人は話を続けた。

「そうではないかな」

「フン」

だが怪物は老人の言葉には答えようとはしなかった。

「だったらどうというんだ。どのみち貴様等は今ここでわしに喰われる」

「話のわからん奴じゃな。そんなことはないと言っておるのに」

「わからんのは貴様の方だ。こんなもので」

そう言いながら札を剥がす。

「わしをどうにかできると思ったか」

「うむ、できるぞ」

老人は臆することなくその言葉を返した。

「麒麟を甘く見るでない」

「あの、易者さん」

「何じゃ」

彼は高志にまた顔を向けた。

「どうして麒麟なんですか？」

「属性じゃ」

「属性」

「うむ。死人はな、地におったな」

「はい」

「世の理では死人は土に還る。それが常じゃ」

「それはそうですね」

「じゃがこうした魔物はその理に逆らう魔物なのじゃ。だからこそ麒麟を出したのじゃ」

「麒麟って土の属性なんですか」

「五行思想ではそうされておる」

老人は答えた。

「黄竜や蛇だつたりもするがな。じゃが麒麟である場合もあるのじゃ」

「はあ」

「その麒麟の力じゃ。効かぬとは言わせぬぞ」

「まだそんなことを言うか」

怪物はそれを聞いて激昂した。

「ふざけた奴だ。こうなれば」

「来い」

老人は今度は挑発した。

「では教えてやるわい。麒麟の力をな」

「その前に貴様を喰らうてやるわ」

怪物はゆっくりと向かって来た。動き自体はそれ程速くはない。やはり死人であるせいだろうか。

だがその足から瘴気があがっていた。白い気がシューシューと音を立てている。そこからこの怪物が只の怪物ではないことがわかった。

「心配することはないぞ」

だが老人は高志にこう声をかけてきた。

「相当な力を持っておることはわかっておった」

「はあ」

「じゃから用意してきたのじゃ。案ずることはない」

「あのお札の他にも何かあるんですか？」

「うむ。心配するな」

そう言いながらまた懐から何かを取り出してきた。

「これじゃ」

それは一本の縄であつた。

「縄」

「走縄とってな。山伏達が持つておるものじゃ」

老人はこう説明をした。

「山伏が」

「わしは易の他にも修験道もやっておつてな。その道具なんじゃ」

「さっきのお札もですね」

「うむ」

彼は頷いた。

第七章

「魔物を調伏する為にこの街に来たのじゃよ。今まで隠しておいて悪かったな」

「いえ」

「ではすぐに退治するでしょう。どのみち放っておくわけにもいきまい」

そう言いながらその走縄を怪物に向かって投げつけた。すると縄は怪物の身体を縛った。これで怪物は動きを止めた。

「ぬおっ」

「そろそろ終いじゃ」

老人はそう言うのと懐からまた何かを取り出した。今度は数珠であった。

「これで」

数珠もまた投げた。それは怪物の身体に当たるとシューシューと燃えはじめた。

「グオオッ」

「効くじやろう。これは普通の数珠ではないからな」

「そうなんですか」

「特別に法力を込めておつたのじゃ。三日の間な」

「その準備だつたんですか」

「うむ。待たせたな、その間」

「いえ」

高志は首を横に振った。

「化け物を倒すんですから。それも当然ですよね」

「そして止めじゃが」

呻き、苦しむ怪物を見ながら言う。

「その小刀を貸してくれぬか」

「ここに来る前に僕に渡してくれたあれですか」

「左様、それで奴の頭を刺す」

老人は怪物に顔を戻しながら言った。

「それで全ては終わる。よいな」

「はい。それじゃあ」

高志はそれに従い小刀を老人に手渡した。

「お願いします」

「うむ」

老人はそれを受け取った。そしてすつと前に出ると小刀を大きく振り被った。

「これで」

終わらせるつもりであった。そしてそれを怪物の頭に刺した。

それまで呻いていた怪物の動きが完全に止まった。苦悶の顔で動きを止める。それで全ては終わった。

「グオオオオオオオ・・・」

断末魔の呻き声と共にその身体を白い蒸気が覆っていく。それと共に身体が消えていく。次第にそれは小さくなりやがて完全に姿を消した。そして怪物は消えてしまった。

「終わりましたね」

「うむ」

老人は高志の言葉に頷いた。二人は怪物が消えた場所を見下ろしていた。

「何か呆気無かったですね」

「もつと手こずると思ったのじゃがな」

老人は数珠と縄を手にとりながら述べた。

「じゃが。用意を怠らなくてよかったわ」

「はあ」

「思ったより楽に終わらせることができた。何よりのことじゃ」

「けれど何でこの街にこんな化け物が出て来たんでしょう」

「たまたまじゃ」

「たまたま？」

「左様。無論この街でない可能性もあった」

老人は高志の手を取りながらこう述べた。

「他の街でもな。やろうと思えば何処でも出来るものなんじゃ」

「そうなんですか」

「魔物は場所を選ばんよ」

壁を潜りながら言う。

「何処でも好きな場所に現われる。それが魔物というものじゃ」

「そうなんですか」

「人の世界とは違う世界に棲んでおるからのう」

そう言いながら店から出た。

「わし等みたいは何時何処で何をするか、全くわからんのじゃ。じやから退治には手間がかかるのじゃ」

「厄介な連中なんですね」

「厄介でなければ魔物ではないぞ」

老人は店から出るとその手に火を出してきた。

「それが魔物じゃからな」

「ところで何で火を出しているんですか？」

「これか？」

見れば誰もいなくなった店に火を点けていた。

「後始末じゃよ。最後のな」

老人は特に気にすることもなくこう説明した。

「この街の人も人を喰っていたとか知りたくはないじゃろう。それをうやむやにするんじゃ」

「そうじゃなくて」

「火は悪しきものを浄化するのじゃ。最後はこれで締めねばな」

「いえ、そうではなくて」

「何が言いたいんじゃ、それでは」

あまりにも高志がしつこいので顔を向けてきた。

「放火ですよ、これって」

「心配無用、警察の上の方にはもう話を通してある」

彼は言った。

「こうした事件はな、結構多くてな。後の処理は任されておるんじやよ」

「でも周りに火が」

「その心配もいらんよ」

もう火は店全体を包み込んでいた。

「術の火じゃからな。この店だけ燃やせば終わりじゃ」

「そうですか」

「これで。何もかも終わりじゃ」

「はあ」

「この街も平和になるさ。人の目も暫くしたら元に戻るぞ」

こう言い残して老人は燃え盛る店を後にした。高志はその後ろをついていく。こうして人肉ラーメン屋はこの街からなくなったのであった。

事件は火事で片付けられた。老人の言う通りあのラーメン屋だけが全焼し後には何も残らなかった。とりあえず店長、つまりあの怪物が焼け死んだとだけ新聞の記事には書いてあった。だがそれが本当のことではないのは高志だけが知っていることであつた。そして老人の言う通り街の人々の目は次第に元に戻つていった。こうして街は何事もなかったかの様に普通に戻つたのであつた。もつともこれを知っているのも高志だけであつたが。

最初は皆そのラーメン屋がなくなつて残念そうにしていたが何時しか皆忘れてしまった。そして他の美味い店に入るのであつた。

「ねえねえ」

また葉子が高志に声をかけてきた。

「またラーメン屋なのかい？」

「違うわよ」

葉子は困った顔をする高志にそう返した。

「そういつもいつもラーメンばかり食べてるわけじゃないわよ、あたしも」

「そうなんだ」

「それでね」

葉子は上機嫌で高志に話してきた。

「今度は美味しいハンバーガーショップを見つけたんだけれど」

「ハンバーガーショップ!？」

「そうよ。本格的なハンバーガーを出してくれてね」

見ればその目が今までとは違っていた。

「アメリカのあれみたいに大きくておまけに美味しくて。一度食べたら病み付きになるんだから」

「病み付きに」

「あんたも一度言ってみたらいいわ。何なら連れて行ってあげるわよ」

「うん」

高志は無感情に頷いた。ハンバーガーよりももつと気になることが目の前にあったからである。

それは目だった。葉子の目だ。今彼女の目はまた赤くなりはじめていたのだ。

「何か最近物騒だな」

遠くからクラスメイトの声が聴こえてきた。

「またホームレスの行方不明が増えてるそうだよ」

「うちの学校のチーマー達もだな。何処に行ったんだろっな」

(やっぱりね)

高志はそれを聞きながら心の中で思った。

(また易者さんから話が来るかな)

だがそれは言わなかった。ただこれから起こることに少し心の中で溜息をついただけであった。結局魔物というものからは離れられないのかな、と考えるだけであった。

2
0
6
·
1
·
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3207f/>

赤い目

2010年10月8日15時15分発行